

ジャコバン共和国における アイデンティティをめぐる試論

佐々木 夏子

1.

イタリアでは、周知のとおり、生きるためにはサッカーの雰囲気呼吸する術を身につけていなければならない。それは独特の所作によって確立された、あるカルチョのチームのサポーター(tifoso)になるという、理想的な風土である。このように、あるクラブに与することから、人生と価値の世界とを理解する方法が生まれてくる。⁽¹⁾

ACミランの(悪)名高い応援団、「赤と黒の旅団」の創設メンバーの一人であったトニ・ネグリはイタリアのサッカーについてこのように述べている。「あるカルチョ」ーネグリにとってはACミランのサポーターになるということは、「ミラノの大金融ブルジョワジー」⁽²⁾のチームであるインテル・ミランに対し、ミラノという都市での階級闘争においてプロレタリアートの「人生と価値の世界とを理解する方法」なのである。

またカルチョはしばしば都市間の代理戦争とも例えられている。「弱い中央政府を背景に、ミラノやトリノが首都ローマと競いあい、経済的政治的重みを手に入れ、地方の支配階級としての権力を強めようとしている」⁽³⁾のである。しかし国家の中での都市間・地域間のライバル関係をサッカーの中に見出したいのならスペインの方がより分かり易い例であろう。フランコ政権の間に長く

抑圧された経験を持つスペイン諸地域の、国家とは相容れないアイデンティティの強い希求はかの地でのサッカーの風土に大きな影響を与えている。目下世界最高のチームにしてスペインの首都のチームであるレアル・マドリードと、長くライバル関係にあるACバルセロナ、バスク人しか選手に取らないことで有名なアスレティック・ビルバオといった個性的かつ潤沢な資本に恵まれた「強い」チームを持つスペインのクラブリーグは欧州で最も高いレベルにあるという評価を与えられ、またサポーターもそれを誇りにしているが、国家の代表チームはワールドカップや欧州選手権といった重要な大会でベスト8どまりという不名誉な伝統を持っている。

フランスのサッカーはスペインの風土とは全く対極にある。フランスの代表チームは世界最高である。2002年は屈辱的な成績を残してしまい、現時点でのチームの戦力は世代交代の失敗、結束力の不足などの問題点を抱え1998年から2000年の黄金時代には及ばないかもしれないが、チームを構成する個々の選手たちが世界で最も高いレベルにあることを疑うことはできない。

しかし、フランスのクラブチームが置かれている状況は長く苦しいものであったし、

現在のはかつてと比較すれば「盛況にある」と言えるかもしれないものの、イタリア、スペイン、イングランド、ドイツ、オランダといった欧州各国のリーグに肩を並べているとはとても言えない。「クラブは一流、代表は二流」と言われるスペインに対して「代表は一流、クラブは二流」のフランスの伝統の原因を、パトリック・ミニョンは「ジャコビニズム(革命的中央集権主義)と、パリによるすべての大きな決定機関の独占が、サッカーから、あのサッカーに賭けられるものを取り払ってしまっている」⁽⁴⁾と述べている。

「イングランドの欠点が情念^{パッション}の過多であるとしたら、フランスの欠点はむしろその欠如だろう」という問題設定で始まるミニョンの議論は、その問いにまず「これはフランスで愛好され、実際におこなわれているスポーツの多様性の表れとも言えるだろう」⁽⁵⁾と答えてみせる。確かに、ツール・ド・フランスやル・マンのように華やかなスポーツ・イベントに比肩しうるものがイングランドにあるかと問われれば、あまりにもサッカーの影が濃すぎるような気もする。しかし、重要な問題はこの答えとは別のところにある。

私たちはイングランドで最もサッカーが盛んな地域がロンドンを別にすれば、マンチェスターやリバプール、バーミンガムといった工業都市であることを思い出さなくては行けない。イングランドで、サッカーのサポーターとなるべく労働者階級が上記のような都市へ集中した過程が、フランスには欠けている。

フランスのサッカーは今世紀の初頭から、大きく言って未だ農村的な社会で発展してきた。イギリスにおいては1911年に人口10万人を数える都市が36あったが、フランスは1960年になっても及ばない。1945年にはフランスの人口の45%は農村的共同体に暮らしており、1950年代まではフランス人の大半は、大きな人口密集地帯や大きな産業のある地域よりは、行政区分上の小都市か小さな工業都市に、あるいは農村部の大きな村で暮らしていた。⁽⁶⁾

そして、勿論多くの人々がパリに「集中して」暮らしていた。サッカーにとっての結果としての問題は、フランスにはパリとヘゲモニーを争えるほどの都市が存在していない、ということであろう。

こういった歴史過程が以下のような状況をサッカーにもたらしたのである。

フランスにおいてサッカーは、その発展期とその後においては中小都市の出来事だった、つまり現在ならオセール、ソショー、サンテティエンヌ、1950年代のランス、スダン、両大戦間でいえばアレス、セートといった具合である。パリやマルセイユのような大都市のクラブは限られた一時期しか大きな力を発揮してこなかったし、しばしば下部リーグ落ちの苦悶はおろか、プロリーグからの撤退、純然たる消滅をも味わっている。⁽⁷⁾

そのような状況のため、フランスではサッカーへの情念をはぐくむことが困難であった。クラブはサポーターとなるべく人々の共同体幻想を編成するにはあまりに貧弱な組織であったと言えるであろう。

それでは、サッカーにとって理想的な風土とはいえない状況を生きる「行政区分上の小都市か小さな工業都市に、あるいは農村部の大きな村」に暮らす人々にとっては、何が「人生と価値の世界とを理解する方法」となっているのだろうか。

ネグリは「スタジアムに行くことは、自分がある階級に帰属していることを再認識し、《熱狂 tifo》を通して独特の都市文化を表現し、アイデンティティのための戦いを交えるのと同義であった」⁽⁸⁾と述べている。

では、フランス人にとっては、どのような「アイデンティティのための戦い」があるのだろうか。

2.

ジャコビニズムの理念にとっては、フランス人のアイデンティティとは「フランス人」であること意外には存在しない。この括弧のついた「フランス人」とは、すなわち、

革命の理念に賛同する共和国の市民のことであり、ガリア人を祖先に持つヨーロッパ西部の白人だけを意味する語とはならない。

では「革命の理念に賛同する共和国の市民」とは一体誰のことになるのか。

現状から端的に言ってしまうと、それはフランスで出生した者とほぼ同義となる。日本では在日韓国／朝鮮人並びに他の日本生まれで日本語しか話せない「外国人」の存在が示しているように、日本人という血統が国籍に関わっている。そのため日本人には民族の概念と国民の概念とが曖昧なまま交じり合い、「誰が日本人なのか？」という問いは常に緊張感を孕んだ議論となっている。

「誰がフランス人なのか？」という問いも、勿論複雑な議論を呼ぶのだが、しかし法律が定める「フランス人」ははっきりしている。

1993年にパスクワ三法が可決されるまで、親がフランス国籍保持者でない場合でもフランスで出生した者は自動的にフランス国籍を付与されていた。(パスクワ三法とは、国籍の取得を申告制に変更した法律で、それにより窓口＝国家の出先機関での却下もありうる。可決の背景としては80年代からの国民戦線の躍進に代表されるフランス社会の右傾化並びにエスニック化という問題が深く関わっており、非常に重要なのだがその議論はここでは控える。)

フランス国籍の出生地主義の理念とは、あなたが誰でどこからきたのか、フランス共和国は問わない、ということである。民族・宗教などの帰属を不問にし、唯一つの帰属先は「フランス共和国」なのである。故に共和主義原理においては、共和国の構成員＝「市民」は、理念上は差別のない「平等」な存在として扱われる。「人間は、生まれながらにして、自由であり、権利において平等である」⁹⁾のだ。大革命は、カトリック教会とアリストクラシーの支配を転覆するために闘われた。第三身分の解放のための重要な原則である、非宗教化、あるいは世俗主義と制度化された身分差別の撤廃において、共和国に属する市民は「個人」以外の何者に

もなり得ない。

故にフランス共和国の代表チームは、「選手構成がヨーロッパの国には珍しいほどハイブリッド」⁽¹⁰⁾であることを可能としているのである。共和国のチームは、選手の「起源 root」を問わない。彼らはそれぞれの「個人」的な「経路 route」を経た、共和国市民の代表として青いユニフォームに身をまとうてサッカーをする。

パリ生まれだが、アフリカ系であることが一目でわかるFWのティエリ・アンリは2002年のワールドカップを目前に控えていたインタビューでこのように語っていた。

スポーツは多くの人々の心を開くことができる。'98年のチームは様々な人種や背景を持つ選手で構成されていたし、フランスという国の多様性をよく表していたと思う。僕たちができる唯一のことは、一番重要なのはユニフォームの色であって、肌の色ではないということ世間に示すことなんだ。優勝を決めたあの日、シャンゼリゼでは、ありとあらゆるバックグラウンドを持つ人たちが、お互いに抱き合ったりキスしたりしていた。⁽¹¹⁾(強調は引用者による)

アンリのこの発言は共和国型統合理念をよく表している。黒人、アラブ人、ポリネシア人、白人その他それぞれの多様な「肌の色」は重要ではない。「重要なのはユニフォームの色」、共和国の象徴である青と白と赤のトリコロール⁽¹²⁾であり、その理念の下では個人の「ありとあらゆるバックグラウンド」=rootは問題とならない、はずである。

3.

しかし、このように言うこともできる。ジャコバン共和国の三色旗の下では人々は各々の「ありとあらゆるバックグラウンド」を問うことが不可能である、と。人々は個人としての「市民」＝すなわち「フランス人」以外の何者にもなることができない。

スペインのサッカーの風土についてもう一度考えてみればよい。世界最高の国内

リーグを擁しながら、国家の代表チームは「万年ベスト8」と揶揄されている、スペインではこのように言う人もいる。「何故「スペイン代表」が必要なのか？」カスティリア人とカタルーニャ人とバスク人とガリシア人とアンダルシア人が同じ一つの「代表」を構成する必要があるのか、と。

この問いが現実離れたと言えないのは、既に「英国代表」というチームがないことを私たちは知っているからである。あるのはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという国家とは違う共同体を代表するチームだけである。それがスペインで不可能なはずはない。ただ、何故かそうはなっていない。フランコの時から制度がそのまま残っているだけか。だからカタルーニャ人、バスク人、ガリシア人その他はスペイン代表に対しては、どうせ大した活躍をしないということもあって冷淡である。彼らの情念は「国家に抗するような共同体」⁽¹³⁾、すなわちリーグのクラブに向けられる。

フランスのジャコピニズムはその原理上「国家に抗するような共同体」を認めることはできない。共和国市民は「生まれながれにして、自由であり、権利において平等」な個人であり、その個人の集合が「フランス」である。

しかし現実のフランス共和国という国民国家が完全に理念的な共同体で、出自=rootに基づく差別がないわけでは、全くない。誰のことを指すのかわからない、「純粋なフランス人 *français de souche*」という概念は北米の WASP 以上に役に立たなくなっているにしても、ガリア人の子孫というエスニシティが「フランス」という多かれ少なかれ「民族国家」と呼ばざるを得ない共同体のマジョリティであることは、大革命の18世紀はおろか現在にいたるまでそうである。このことはソビエト連邦が理念上民族対立はあり得ないと言うことが現実とどれほど大きな齟齬をきたしていたかを考えてみても、よく分かる。

共和国市民と「フランス人」が実際に等号

で結ばれている以上、その「フランス人」が誰を指す言葉なのかは常に緊張に充ちたポリティクスを抱えている。アンリにとっては、それは「肌の色」ではなく「ユニフォームの色」によって決定される。しかし、アンリと同じく98年ワールドカップ優勝時のメンバーだった、ニューカレドニア出身のMFクリスチャン・カランブーはこう言っていた。

私は自分がフランス人であると感じたことは一度もない。私は自分がどこからやってきたのか、どこで生まれであるかを知っている。
(14)

カランブーのこの発言は、共和国型統合理念とは相容れない、自身の出自にこだわったアイデンティティのあり方を表しており、当時大きな物議を呼んだ。ジャコバン共和国は個人に、「どこからやってきたのか、どこで生まれであるか」に基づくアイデンティティを認めないことは既に議論した。しかし、その理念がガリア人の子孫ではない人々にとって、平等を約束する理念であるかどうか。カランブーは信じていない。

4.

フランス共和国の市民権を有することが真の平等への足がかりにならないと疑っているのは、カランブーのようにフランスではないところから来た人々だけではない。ジャコピニズムとは革命的中央集権主義、であり「中央」があるということは常に「周辺」が存在する。あるいは、「中央」は「周辺」の存在があってはじめて「中央」として振舞うことが可能となる。

既に議論したとおり、フランスのような中央集権国家では国家の代表チームが愛され、地域に基づくクラブチームは苦しい状況に置かれる。しかし、ネグリが言う「アイデンティティのため戦い」がフランスで全く戦われていないわけではない。

…こうした代表と国家の再構築に対する地域からの反発も高まっている。マルセイユ、コルシカ、バスクなどでくすぶる地方の分権と独立への情念は、こうした代表とその象徴(例えば、フランス国歌)に対する異議申し立てを生む。これらのクラブのサポーターたちは代表チームをけなし、国歌演奏をやじる。⁽¹⁵⁾

2002年のワールドカップ開幕に先立つこと1ヶ月弱、フランス大統領選挙の直後にサントニのスタッド・ド・フランス行われたフランス・カップの最終戦では以下のような状況が見られた。

…バステアとロリアンの間で争われたフランス・カップ最終戦がシラク大統領臨席の下、パリ郊外の国立競技場で行われたのだが、国歌斉唱の際、コルシカから来た独立派のサポーターたちが盛大に野次を飛ばし、激怒したシラクが試合開始を待たずに競技場を後にするという事件があった。⁽¹⁶⁾

革命的中央集権主義によって中央＝パリへの従属を強いられてきた周辺地域にとって、むしろ抑圧装置として機能してきた共和国の掲げる理念は、ネグリが言う「アイデンティティの戦いを交える」相手となりうる。

では、周辺地域＝コルシカにとって、共和国がどのように抑圧装置として機能してきたのかを考えてみたい。

5.

コルシカは、紀元前から歴史に登場する時は常に植民地としてだった。最初にやってきたのはフォッカイア、次にエトルリアやカルタゴが代わる代わるこの島の支配者となる。紀元前259年ごろにローマ領となり、ローマ帝国が衰退すると今度はヴァンダル族や東ゴート族が次々と島を襲撃するようになった。6～8世紀にはローマ教皇庁が領有を宣言するも、8～10世紀にはイスラム勢力の支配を受け、1077年からはピサ領。1284年に支配者はジェノヴァへ代わり、18世紀までその支配は続いた。ジェノヴァ支配の末期にバスクワレー・ディ・パオリとい

う今をもってコルシカ人の英雄である一人の男が独立戦争を組織し、1755～1769年という短い期間はこの島が歴史上唯一海の向こうからやってきた支配者を持たなかった時代である。ジェノヴァの次にやってきたのがブルボン王朝のフランスであり、フランスの「支配」は現在にまでいたる。

コルシカがフランスに組み込まれた1769年には、この島の歴史にとってももう一つ重要な出来事が起きていた。島の南西部にあるアジャクシオという街で、ナポレオーネ・ボナパルテがこの世に生を受けたのもこの年のことであった。

フランスにとってもこの後数十年は大変な時代であった。故にフランスのコルシカ支配は、どう転んでもおかしくなかったかもしれない。独立戦争が終わったのは大革命が起こるほんの20年前であり、その後政情不安のフランスはコルシカのために力を注いでいられる余裕はなかったし、パオリもまだ存命中である。実際、「ロンドンで亡命生活を送るパオリにとっても『フランス革命』は朗報であった。旧体制によって奪われた自由を回復し、独立を達成するチャンスだった」⁽¹⁷⁾と考えることは十分可能である。しかし、革命フランスが彼に与えた役割はスケープゴートつまり、ブルボン王朝に対して闘ったパオリを、大革命に先立ってアンシャン・レジーム打倒を果敢に試みた英雄とみなし、コルシカを「フランスの養子」にすることだった。

しかし、パオリは独立への意思を捨て切れず、イギリスに支援を求め1795年には「アングロ＝コルス王国」が成立する。しかし、イギリスはそれほど乗り気ではなかったし、その4年後にはナポレオーネ・ボナパルテ改めナポレオン・ボナパルトがフランス共和国の終身統領の座に着くことになる。

歴史には、決定的な偶然が存在する。カール・マルクスにとって、歴史は全て階級闘争によって説明できるのかもしれないが、時系列に沿う大きな流れの中で全てが決定されているのだとすれば、フランスのコルシカ支配がパオリ以降大きな反乱もなく19世

紀を通じて可能であったのかを説明することができない。コルシカは、ギィ・ド・モーパッサンが「地中海に聳える山」と形容したほど平野部が少なく、土地が痩せていて、フランスがこの島の領有にこだわる理由はそれほど多くはない。事実、イギリスはコルシカにはほとんど関心を払わなかった。近代以前には、「寄港地として、中継貿易地として、軍事的拠点として」⁽¹⁸⁾地中海の中でコルシカが位置する地理条件は周辺諸国にとって重要性を持っていたが、航海技術が十分に発達しており、世界史の舞台の中心が既に地中海ではなかった19世紀にフランスがコルシカにこだわる理由はどれほどのものがあつたのか。実際に、コルシカはフランス国内で産業革命が進行する時代の資本主義の発展からは取り残され、見捨てられてきたのである。

コルシカのフランス化が徹底化された、決定的な偶然とはナポレオン・ボナパルトである。ナポレオンが権力の座に着く前に、国民公会によってコルシカにはフランスの他県と平等な地位が既に与えられていたが、より重要だったのは、熱烈なロベスピエール信望者で「革命の子」を自認したナポレオンによる、コルシカのフランス化である。ナポレオンが行ったことで重要なことは、フランスの中央集権化を図る法律の制定と施行もそうだが、コルシカについて言えば、反革命的な不穏分子の徹底した迫害と虐殺、並びに自身の息のかかったコルシカの有力者を中央権力に登用すること、すなわちコルシカにおいてボナパルティズムを浸透させたことである。ナポレオンの行ったコルシカのフランス化は理念的なものである以上に遥かに流血によるものであつたが、その後には共和国化つまりフランスへの「同化」が進められる土壌を形成した点で極めて重大な役割を果たした。

共和国理念に基づいたコルシカのフランス化とはどのようなものであつたか。共和国にとっては、それは「自由・平等・博愛」の精神に基づいて、他のフランス諸県と平等な地位及び権利をコルシカに付与すること

であつた。

一方コルシカの側から見れば、それは侵略行為ということになる。コルシカは歴史上それまでフランスとは大きく関わってこなかったし、文化的な親近性はほとんどなかった。とりわけ言語においては、コルシカで話されている言語は標準イタリア語に近い。

革命によって誕生した共和国は、その理念に基づく国民の編成に着手する。「平等」な市民の結合による「単一不可分の共和国」の理念は、革命の防衛の観点からもジャコビニズムの金科玉条であつた。そのための大きな役割を果たす国家装置が公教育であり、共和国の学校で使用され、教育される言語はフランス語である。

…集権的国家支配のもとに、共和国は革命以来、地域後を抑圧し、禁止するために可能なすべてを行つた。共和国の学校の「黒い軽騎兵たち」(師範学校卒の小学教師のこと)は、フランス語を母語としない地方の子供たちにフランス語を叩き込んだ(「校庭で唾を吐くことと方言を話すことを禁ず」)。⁽¹⁹⁾

フランスの公教育にとってとりわけ重要な出来事は1880年代に小学校の無償化と14歳までの義務教育を明記したフェリー法の施行であり、「1870年の普仏戦争の敗北後成立した第三共和制にとって国民統合は差し迫った課題」であつたので、「ナショナル・アイデンティティを自覚する共和国市民の育成が目ざされた」。⁽²⁰⁾

「ナショナル・アイデンティティを自覚する共和国市民」にコルシカ人を育成するのに更に決定的な役割を果たした国家装置が軍隊である。アレクサンドラ・ジャッフィーは軍隊の重要性について以下のように述べている。

19世紀に徴兵された多くの若者にとって、兵役は、島から出た後にフランスの各地から集った他者と接触する最初の場となった。フランス語を話すことは軍隊のコンテクストにおいて実践的な要求となり、(中略)国民の概念は軍隊において生きられた経験の一つと

なった。⁽²¹⁾

学校、そして軍隊といった国家装置によってコルシカ人はフランス共和国へ編入されていき、コルシカ固有の文化は「劣ったもの、恥ずかしいもの」と見なされてきた。

しかし、抑圧された民の誇りは消え去ることはなかった。19世紀末には既にコルシカ方言新聞『トラムンターナ』が発刊され、20世紀前半には自治主義新聞『ムーヴラ』、地域主義文学雑誌『コルシカ年報』が発刊された。第二次世界大戦でファシズムと闘うフランスの国民編成は強化されたが、戦後1960年代には地域主義が高揚していく。その背景としては北アフリカからの引揚者がコルシカに移住し、「引揚者は国の財政的支援を受け」島内でワインの醸造などに従事し「瞬く間に得た成功や富を不注意に誇示するものもいて、島民の苛立ちを掻き立て」⁽²²⁾たことや、島での地下核実験施設が計画されたこと、73年の「赤い泥」事件⁽²³⁾などで島民の国への不満が高まったことと、68年5月革命からの思想的影響が上げられる。

70年代以降、コルシカの地域主義、並びに自治主義は形を伴った結果に結びついていく。74年には文部省によってコルシカ語が地域語として認定され、公立学校での教育が認められるようになった。大統領が社会党のフランソワ・ミッテランになった後、81年にはコルシカ大学がコルテに設立、82年には「コルシカの特別地位と権限に関する法」によりフランス本土に86年から開設される州とは異なる特別地位を持つコルシカ州議会が開設、91年の「コルシカ領域共同体に関する法(ジョックス法)」によって、特別な権限が付与された「領域共同体 *collectivité territoriale*」という地位に「昇格」する。またコルシカ文化の復興も、主に音楽の分野で盛んになってきた。70年代に結成された *Canta u Populu Corsu* (カンタ・ウ・ポーブル・ゴールス) が先陣を切ってから、コルシカの民族音楽、ポリフォニーは大きな成功を収め、*I Muvrini* (イ・ムヴリーニ) はスティングのような大物ロックスターと競演

するまでになっている。

70年代以降のコルシカのアイデンティティの高揚に音楽の力が果たした役割は極めて大きい。これまで「劣ったもの、恥ずかしいもの」と見なされてきていた島の文化に自信を取り戻させた、音楽家の功績は重要である。

そのような文化の政治学を孕むコルシカのポリフォニーでは、しばしば島への愛着が歌の題材に選ばれる。

コルシカ人よ／胸をはって／歌うんだ／独立のうたを／
くさりをとかれ／自由になるんだ／なにもかも強いる／フランスをはねつけ⁽²⁴⁾

しかし、このプロテストソングのようにフランス／コルシカの関係を抑圧者／被抑圧者の二項対立に還元することでは説明しきれない問題がある。「コルシカ」にとって「フランス」は、「我」に対する「汝」であるだけではなく、「我」でもあるはずである。

この歌において「フランス」という言葉は、何を指し、また何を指していないのか。このコンテクストにおいてコルシカがそこに含まれていないことは間違いない。ではバスクやブルターニュといった、コルシカ同様他民族の文化を生きることを強いられ、失われ蔑まれた文化とアイデンティティの尊厳を取り戻すために闘っているフランスの他の地域は含まれているのだろうか。また、フランスの旧植民地出身で様々な肌の色をした共和国市民は含まれているのだろうか。彼らは含まれていないのだとしたら、では「フランス」とは誰を、あるいは何を指す言葉になるのか。具体的な人々に当てはめる言葉ではなく、共和国・革命の理念、転じてイデオロギーを指すのだとしたら、コルシカはそこに含まれていないのであろうか。

6.

観光ガイドや、あるいはしばしば学術的な著作においてもコルシカの歴史の概略や

簡易な年表において、「語られること」／「語られないこと」はこれまでほとんど同じ構造を持っていた。例えば、このような記述になる。

コルシカ島はナポレオンの生地として有名だが、フランス領となったのはナポレオンの生まれる1年前、ちょうどフランス革命が勃発する20年前のことだ。それまでは、ローマ帝国に続き、ピサやジェノヴァなどイタリア諸侯の支配下におかれていた。1768年、ヴェルサイユ条約によりコルシカがジェノヴァからフランスに譲渡されたが、その前後にパスカル・パオリを首長とする独立戦争が起こった。20世紀に入り、農業・牧畜意外にこれといった産業がなく、経済基盤の弱いコルシカ島からフランス本土や海外植民地に職を求めての離縁組があとを絶たなかった。

第一次・第二次大戦をはさんだ1920～30年ごろ、島の将来に危惧を抱いた地元紙がコルシカの権利要求運動(ムヴリスト)を展開した時期もあった。⁽²⁵⁾

これは極端な例であるかもしれないが、しかし多くの歴史記述は上に引用した文とほぼ同じ構造を持っており、

1. 紀元前からイタリア半島の勢力を中心とする他者の支配下におかれていた。
2. 18世紀前半にジェノヴァ支配に対する独立戦争を蜂起したが、フランス軍に鎮圧され、その後フランスの支配は現在にまで至る。
3. 貧しい島からは流出者が絶えず、島は衰退を続ける。
4. その後不満が高まり自治要求などの運動が高揚。現在に至る。

といった展開となる。コルシカの作家・歴史家のロベール・コロナ・ディストリアもフランス併合後のコルシカの歴史は簡潔に3つの時期に分けられると述べている。⁽²⁶⁾第一期は1768年から1870年で、この時代にはフランスがコルシカをフランス化するために腐心した。コルシカに特別な計らいをとっていたナポレオン三世の第二帝政崩壊と共にこの時代は終わる。第二期は1870年から1960年にフランスが植民地政策に力を注ぎ、山がちで資源も少ないコルシカの開

発にフランスが関心を示さなかったため、島から流出者が絶えなかった衰退の時代であり、第三期の1960年代以降は権利要求の時代となる。

私が問題にしたいのは、コロナ・ディストリアの分類による第二期、1870年から1960年に「フランス本土や海外植民地に職を求めて」離散したコルシカ人についての記述である。こうした歴史記述において記述する主体はコルシカがフランスの支配によって置かれている隷属状態を語ろうとするため、貧困から抜け出すために「海外植民地に職を求め」る離散者としてのコルシカ人しか語らない。植民地が語られるときに、植民者の表象しか行われず、被植民者のことが語られないのは何故なのだろうか。

この問題はコルシカを、国民国家＝フランスにおける内国植民地としてだけ語ろうとし、国民国家への異議を申し立てる隷属地域として扱うことから起きる。それは間違いではない。しかし、それは事実でもない。英国の東欧史研究者ノーマン・デイヴィスは「カメラは歴史家と同じように、常に嘘をつく」⁽²⁷⁾(強調は引用者)と述べている。「・・・修正をいっさい施さない写真家でも、アングルや撮影の瞬間のタイミング、光線やトーン、写真のテクスチュア、なかでも被写体を自由に選択することによって、人目にさらしたのと同じ分だけ隠しておくこともできる。」(強調は引用者)このことは、そっくりそのまま歴史家にも当てはまる。

SCバステリアのサポーターが「ラ・マルセイエーズ」に野次を飛ばしたのは、事実である。しかし、その事実を語ることによって、記述は(間違いなく存在する)フランス代表の応援をするコルシカの人々のことを「隠して」しまうのである。

しかし、問題はそこにはない。なぜなら先に述べたようにカメラも歴史家も「常に嘘をつく」のであるから、重要なことはそのことにではなくどのような「嘘」をつくの、ということにある。そして、その「嘘」は何のためにつかれたのか。

コルシカはフランスの内国植民地であっ

ただけではない。紛れもなくフランス共和国並びにフランス帝国の一部であり、加えて、そのイデオロギーを最も強力に実行に移した集団であったと言うこともできる。フランスによって植民地状態に置かれながら、あるいはそれ故、フランス人として振舞うことが生死のかかった「アイデンティティのための戦い」であったコルシカ人は、フランス史における二人の皇帝だけが決して例外なのではない。コルシカ人の公務員志向は現在でもよく知られている。サイゴンに生まれ、コルシカ人の父とベトナム人の母を持つ作家で歴史家のフィリップ・フランキニは「コルシカ人以上の帝国主義者を見つけることは困難であった。」⁽²⁸⁾と述べている。故に、私たちは「胸をはって独立の歌を歌うコルシカ人」と「なにもかも強いフランス人」という単純な二項対立は、それほど自明な構造ではなく、修正は施さなくても、アングルや撮影の瞬間のタイミングその他と、とりわけ被写体を自由に選択して表象した「万年筆」の「嘘」であることと、その「嘘」の目的を確認しておかなければならない。

私がこのことを殊更に取り上げる必要性を感じるのは、コルシカ人が帝国主義者であった過去を穿り返して、断罪するためではないことを述べておいたほうが良いかもしれない。より重要な問題は、国家の周縁におかれたコルシカ人が国家権力の忠実な体现者となるに至る原因である。共和国における権力の構造は抑圧者／被抑圧者といった単純な上部－下部構造では説明できないのである。そしてコルシカのような周辺地域にとって共和国の理念は抑圧装置であるだけでなく、解放の手段でもあり、それ故問題は複雑であることを認識しなければならないのである。

7.

国家権力の遂行者であるコルシカ人というステレオタイプは、実際フランス人の間で一般的に広く普及している。フランキニ

の『コルシカ人のステレオタイプ』(原題: *Les Corses idées reçues*) には、「コルシカ人は税関吏か曹長か刑務所の監視員である」というステレオタイプをめぐる分析に一章が割かれている。

その極端な例は、例えばセリーヌの『夜の果ての旅』に登場する、仏領赤道アフリカ(小コンゴ)に赴任しているグラッパ中尉の表象に見られる。セリーヌは「単に租税をしばり出す目的で被征服民を鞭打ち、(中略)恥知らずな個人的分け前を取りのける、いわばローマ風の、グラッパ中尉の文明」²⁹は中尉がコルシカ人であることに属す性質だとは説明していないし、グラッパ中尉に対してだけコルシカ人であることを明示しているのではなくほとんどの登場人物がその出身地を記されているのだが、コルシカ人のグラッパ中尉をこのような官職並びに性格を持ち合わせた人物として表象しているのは、やはりフランキニの述べるステレオタイプの一例である。

コルシカの人口は約25万人で、フランスの総人口に占める割合はおおよそ0.75%となる。しかし、植民地の軍人の中でコルシカ人が占める割合は22%にも上る。⁽³⁰⁾フランス植民地支配の歴史においてコルシカ人が果たした役割は極めて大きい。

しかし私たちは、なぜ、他者＝フランスによって支配されているコルシカ人がこのように積極的にフランス帝国主義に加担することになったのかを問わなくてはならない。最も大きな理由は、既に述べたとおり第二帝政崩壊以降見捨てられた島となったため、生死のかかったエクソダスであったからである。

しかし、19世紀後半から20世紀前半に、同じように資本主義の発展から取り残された他ヨーロッパ周辺地域、あるいは民族が辿った道のと比較すると、コルシカ人の選択は特殊な事情に彩られていることも分かる。1845～1848年のジャガイモの病害から起こった大飢饉の際アイルランド人はアメリカ大陸を目指した。ロシア帝国内の少数民族、とりわけユダヤ人も「1880年代～

1910年代の40年間に洪水のように押し寄せた。」⁽³¹⁾彼らの後に続き「土地をもたない南イタリアの農民」が大西洋を渡り「1900年頃にはアメリカ全土で約150万人ぐらいのイタリア人がいたという。」⁽³²⁾

この時代に、工業化が進み世界の大国の地位に上る寸前であった合衆国は、故郷を出ざるを得なかったヨーロッパの人々が目ざす移住先として第一番目の選択肢であった。ニューヨークを目指したコルシカ人もいた。しかし、その数はそれ程多くはない。元々の人口が少ないためでもあるが、実際はイタリア人やユダヤ人に「華やかな摩天楼、きらびやかな繁華街」ではなく「人口の密集するスラムがひろがり、貧困と疎外、低劣な労働条件、低賃金、長時間労働、頻繁な失業、病気、犯罪、差別に苦しむ」⁽³³⁾過酷な「移民」としての生活が待っていたのに対して、コルシカ人にとっては「フランス人」としてのステータスで赴く植民地のほうが移住先として好ましかったからである。そして、彼らは植民者としての任務と人生を通じて「フランス人」となっていくのである。

しかし、彼らは制度上フランス人としての地位を享受する一方、植民地においてコルシカ人としてのアイデンティティと共同体を保っていたことも知られている。フランスにおいては「野蛮」だと見なされているコルシカ人は、アジアや北アフリカなどの非ヨーロッパ世界においてはそのようなまなざしを受けることはなかったのである。特にフランス併合以降、コルシカ人はメリメなどのロマン主義文学者の仕事に代表されるように、一方的に眼差される客体としてあった。彼らはフランスにおいてその普遍主義に基づいた自由と平等を手に入れるためには、コルシカ性を捨てて、他者の文化＝フランス文化を身につけなければならなかったのである。しかし、植民地においては彼らが本国において被っている差別は問題とならなくなる。何故ならコルシカ人は白人であるからだ。実際に肌の色が白いかどうかには関わらず、彼らはヨーロッパ文明

の一員として振舞うことが許される人々なのである。「半分アフリカ人、半分ヨーロッパ人という分類不能な地中海の混血」⁽³⁴⁾と差別されていたコルシカ人にとっては、白人間にもアングロ＝サクソン、ゲルマン、アングロ＝ケルト、東欧系、南欧系といった細かい差別が存在するアメリカ合衆国より、「白人」と「非白人」の二分法で成立している植民地のほうがハイムリッヒな（居心地の良い）思いができるのである。

果たしてこのことは特殊 19 世紀コルシカの事情であるのだろうか。恐らくそうではない。被抑圧者にとって最も重要なリアル・ポリティクスは、抑圧から解放されることである。被抑圧者が解放されるために、自身を抑圧する権力構造に対して闘いを挑むよりも、権力構造に与する方法を選択することは、決して珍しい話ではない。そのとき、抑圧者と被抑圧者の関係は上部－下部構造で捕らえることはできない。

フランス共和国／帝国という場において、誰が抑圧されているのかを問うことはそれ程難しくない。しかし、具体的な個人や共同体として、誰が抑圧者であるのかを問うことは非常に困難である。ジャコバン共和国の理念＝イデオロギーが問題なのか。しかし、先に引いたアンリの発言に表されているように、革命の思想は現代でも有効な解放の手段である。共和国をすぐさま侵略のイデオロギーと片付けてしまうことは、決してできないところに、共和国の問題の複雑さがあるのである。

- (1) ネグリ、トニ「確かなるミラン」陶山大一郎
訳『ユリイカ』特集・フットボール宣言
2002年6月号、青土社
- (2) ネグリ、前掲書
- (3) ミニョン、パトリック『サッカーの情念』堀
田一陽訳、2002年、社会評論社
- (4) ミニョン、前掲書
- (5) ミニョン、前掲書
- (6) ミニョン、前掲書
- (7) ミニョン、前掲書

- (8) ネグリ、前掲稿
- (9) 『人権および市民権の宣言』第一条 高橋幸八郎・柴田三千雄・遅塚忠躬訳
- (10) 陣野俊史「サッカー・部族・共同体」『現代思想』特集・ユーロラディカリズム 1998年3月号、青土社
- (11) スタマース、スティーブ(ロンドン・イブニング・スタンダード)、田邊雅之訳・構成『Number』2002年6月14日号、文藝春秋社
- (12) 第五共和国憲法、第一章「主権」、第二条
- (13) 陣野俊史『フットボール都市論』2002、青土社
- (14) 陣野、「サッカー・部族・共同体」
- (15) 船橋洋一『朝日新聞』一面 2002年5月31日
- (16) 彦江智弘「ぼくが伯父さんと選挙へ出かける日」『ユリイカ』特集・島うた 2002年8月号
- (17) 田之倉稔『麗しき島 コルシカ紀行』1999、集英社
- (18) レヌッチ、ジャニーヌ『コルシカ島』長谷川秀樹・渥美史訳、1999、白水社
- (19) 三浦信孝「共和国の言語、フランスの諸言語」三浦信孝編『普遍性か差異か』2001、藤原書店
- (20) 林瑞枝「イスラム・スカーフ事件と非宗教性」三浦信孝編『普遍性か差異か』2001、藤原書店
- (21) Jaffe, Alexandra "Ideologies in Action Language Politics on Corsica", 1999, Mouton de Gruyter (訳は引用者)
- (22) レヌッチ、前掲書
- (23) イタリアの化学工業(モンテディゾン社)が地中海に有毒廃棄物を投棄していたため、変死したクジラやイルカがコルシカ近海で打ち上げられるようになった。コルシカのエコロジストや地域主義運動家が抗議するようフランス政府に訴えたが、政府は動かなかった。レヌッチ、前掲書
- (24) クロス、パトリック詞/マイ・ペーシュ曲 <Populu Vivu> 植野和子訳
- (25) 植野和子『魂のうたを追いかけて』2002、音楽之友社
- (26) Colonna d'Istria, Robert "La France, continent, métropole ou partie?" in Philippe Franchini eds. "Une dramaturgie corse" 2002, autrement
- (27) ディヴィス、ノーマン『ヨーロッパⅢ近世』別宮貞徳訳、2000、共同通信社
- (28) Franchini, Philippe "Les Corses" 2001, Le Cavalier Bleu
- (29) セリーヌ、ルイ・フェルディナン『世の果ての旅』生田耕作訳、1978、中公文庫
- (30) 出典: Corse Numéro été 2002 de Pays de Provence Côte d'Azur et de Méditerranée,
- (31) 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』1995、山川出版社
- (32) 竹山博英『マフィア・その神話と現実』1999、講談社現代新書
- (33) 野村、前掲書
- (34) 両角良彦『反ナポレオン考』1991、朝日選書における『モーニング・ポスト』紙からの引用

(ささき・なつこ 立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻 博士課程前期課程)